

南草津のまちづくりに関する調査研究報告書

－南草津地域のまちづくりの方向性について－

2013年3月

草津市 草津未来研究所

要旨

第5次草津市総合計画では、草津市も2015年10月には高齢化率が21%に達して超高齢社会となることや、2020年の途中から人口減少が始まることを予測しており、南草津においても今までのような右肩上がりの成長をいつまでも期待することはできない。

過去の南草津の歴史をみてみれば、現在のJR南草津駅周辺は、1980年の第2次草津市総合開発計画で南部副都心整備構想として将来ビジョンが掲げられた後、総合計画でJR草津駅を中心とする北部中心核と対をなす南部中心核として位置付けられ、急速に開発・整備が進められてきた。1994年には、JR南草津駅と立命館大学びわこ・くさつキャンパスが新設され、ハード面を中心に急速にまちが発展した。そして、2011年3月にJR南草津駅が新快速の停車駅となったことで、開発・整備は一つの区切りを迎えた。

そこで、現在、発展の踊り場局面にあるともいえる南草津において、関係者が今後の南草津のまちづくりの新たな方向性を共有していくことが必要になる。そこで、本稿では、今後の議論の広がり期待を込め、各主体のなかで広く共有するための南草津のまちづくりの方向性の提示を試みた。

具体的な手法としては、立命館大学、草津商工会議所、草津市役所の関係者で構成する南草津まちづくり研究会（以下、研究会）と南草津まちづくりワーキンググループ（以下、ワーキング）を立ち上げ、そのなかで議論を行った。

研究会では、ワーキングの企画案をテキストマイニングの手法により分析したほか、過去の南草津の歴史や国勢調査のデータ等を概観し、南草津での現地踏査やヒアリング調査の結果を踏まえて議論を行った。

ワーキングでは、「発案者自らがリーダーシップをとって進めていける実現可能性のある企画案」を各メンバーが出し合い、南草津に不足しているものやあるべき姿の分析を行った。分析の結果から、南草津では①立命館大学の学生力を活用し、地域活性化を図る取り組み②都市インフラを整備し、南草津の新たな産業・魅力を外に発信する取り組み③南草津の住民が主体となりソフト的にまちの魅力を高める取り組みが必要であることがわかった。

また、当研究所独自の調査の結果、南草津駅周辺では、15歳から24歳の年齢層の約6割の人が、住民登録をしていないこと等がわかった。さらに、不動産業者等のヒアリング調査の結果から、住民は南草津を通学や生活の利便性等の理由で一時的に住む場所として

考えられている傾向があること等もわかった。

結論部分では、南草津の強みと弱みから、副都心として機能強化すべき南草津の方向性について、次の3点を挙げた。南草津を周辺地域との関係性のなかでとらえ、短期的にはその強みを生かすことを優先し、中・長期的には弱みを克服していくことで、南草津の個性を際立たせ、南草津の持続可能性を高めることができる。

1つめの方向性は、立命館大学、草津商工会議所、草津市役所から始まる交流である。南草津の強みを生かすためには、立命館大学びわこ・くさつキャンパスの立地環境を最大限に生かし、多様な主体が気軽にまちづくりについて話し合える交流拠点をJR南草津駅前につくる必要がある。市民間の交流の動きも重要であるが、先の三者が率先して行動し、多様な主体を巻き込んで交流を生み出すことも重要である。

2つめの方向性は、住みやすさの維持である。南草津の弱みであるコミュニティの希薄性を克服するため、立命館大学等も巻き込みながら、個々の住民のライフスタイルの変化にも長期に渡って対応できる住みやすいまちづくりを追求していくことが今後の南草津のまちづくりの鍵となる。具体的には、一時的な住まいとして考えている住民を地域に定着させていくため、低い負担で若者や高齢者がその時々々のライフスタイルにあった住居に住み替えができるよう、中間支援の組織も必要となる。

3つめの方向性は、交通インフラの整備である。南田山交差点を中心とする南草津の慢性的な交通渋滞は早急に対応すべき課題であるが、ここでも立命館大学や実際の利用者である市民を交えながら、交通インフラの整備を慎重に行っていく必要がある。

これら3つの方向性のうち、1つめはすぐにでも取り組みを始めることが可能であるが、2つめと3つめはすぐに取り組みを始めることは難しく、中・長期的に取り組んでいく必要がある。

なお、2014年に立命館大学びわこ・くさつキャンパスは開学20周年を迎えるが、JR南草津駅も同時に開業20周年を迎え、草津市政も60周年を迎えることとなる。今後も、10年ごとにこれらの節目の周年記念が重なることから、その都度、関係者が多くの人を巻き込んで南草津のまちづくりの方向性を内省し、新しいまちづくりの方向性を共有していくことも重要である。

目次

はじめに.....	1
第1章 草津市を取り巻く環境変化と都市再整備の必要性.....	2
1 持続可能な都市とサステナブル度.....	2
2 人口減少・超高齢社会を見据えた集約型都市構造.....	3
3 垂直ネットワーク型都市構造から水平ネットワーク型都市構造へ.....	5
4 東日本大震災以後の開発哲学.....	8
第2章 南草津の現状と課題.....	9
1 南草津のエリアと拠点性.....	9
2 短期間で発展を遂げた南草津.....	11
3 地域と住民との関係.....	15
4 商業の偏りから見る駅前の様相.....	17
5 都市施設等から見る拠点機能の弱さ.....	18
6 地域の声から見る南草津の一側面.....	20
(1) 南草津の強みと弱み.....	20
(2) 不動産業者の声.....	21
(3) 地域住民の声.....	22
(4) 立命館大学生の声.....	24
第3章 南草津のあるべき姿.....	26
1 事例から見る駅前の都市機能.....	26
(1) 開かれたまちづくりの場: 柏の葉アーバンデザインセンター(千葉県柏市) ...	26
(2) 住む人が老いることを考えたまち: ユーカリが丘(千葉県佐倉市).....	29
2 南草津まちづくり研究会での一考察.....	32
3 副都心としての南草津の地域構造に関する考え方.....	37

第4章 副都心として機能強化すべき南草津の方向性.....	38
1 立命館大学、草津商工会議所、草津市役所から始まる交流.....	38
2 住みやすさの維持.....	39
3 交通インフラの整備.....	41
おわりに.....	43
関係者一覧.....	44
参考文献.....	45
参考資料.....	47

はじめに

私たちの社会は、いまや地球という資源・エネルギーの絶対的限界と福祉国家型の公益の限界に直面している。このような社会構造の変化のもとでは、もはや行政のみで持続可能な社会を築いていくことは困難である。そのため、市民、企業、大学等とともに、まちのあるべき姿を共有しながらまちづくりを進めていく必要がある。

現在、当市においても、草津市総合計画をはじめとする各種計画で一定の考え方を定め、各主体間でまちのあるべき姿を共有しつつ、ともに役割を担いながらのまちづくりが進められている。なかでも、草津市都市計画マスタープランでは、JR草津駅を中心とする北部中心核と、JR南草津駅を中心とする南部中心核を複眼的に捉え、両核をにぎわい拠点として市全体を発展させる考え方を示しており、各主体が共有すべき当市のまちづくりの重要な視点となっている。

ところで、それら2つの中心核を個別にみても、北部中心核では、中心市街地活性化という一定のまちのあるべき姿が各主体間で共有され、まちづくり会社の設立準備や草津川跡地整備等、具体的な取組みが進められている。一方、南部中心核では、副都心として複合的な都市機能を有する市街地の形成が一定進んできたが、2011年3月に南草津駅が新快速停車駅となり、一つの区切りを迎えている。そこで今、南部中心核については次の段階として、まちのあるべき姿を明確にし、南草津のポテンシャルを高めて生かしていくための新たなまちづくりの方向性が必要になろうとしている。

そのため、この調査研究では、近年の都市計画の分野で注目されている「持続可能性」と「集約型都市構造」という言葉をキーワードとして南草津の将来像について検討する材料を整理し抽出する。そして、南草津のまちの特性と課題を明らかにし、各セクター、つまり、草津市、地域住民、産業界、大学が共有できるまちづくりの中長期的な方向性を示す。

将来のまちのあるべき姿については、本来であれば各主体のできるだけ多くの人とともに、可能な限りの時間をかけて具体的な形で共有していく必要があるが、ここでは草津市役所、草津商工会議所、立命館大学が構成員となる南草津まちづくり研究会での議論をもとに、その前段として基礎材料を整理することを主旨としている。